2005 vol.5 JURY

黄河の森
KFG

発　　行／特定非営利活動法人
黄河の森緑化ネットワーク
代表理事／林　同春
編集責任者／林　青彦 事務局長

〒650-0011
神戸市中央区下山手通り2丁目12-11
神戸華僑会館内
TEL・FAX 078-392-8328
E-mail:kouganomori@s6.dion.ne.jp
URL.http://www.k3.dion.ne.jp/~kougakfg

《热烈欢迎!》　日中友好林記念碑に集合

ああ あの大河 太古より 流れる誇り
ああ その緑 永久に たやさぬ心
燃えたつ生命 ここに ここに

CONTENTS

P.2　第２回通常総会報告
P.2　森林樹木と菌類
P.3　六甲山クリーンアップ活動報告
P.3　2005年度植樹ワーキングツアーのお知らせ
P.3　2004年度植樹ワーキングツアーに同行して
P.4　私と環境(3)　丹波市・下滝いろいろ
P.4　絵本からのエコ・メッセージ
P.5　黄土高原の植物Ⅳ
P.6　KFG主催フォーラムin神戸のご案内
P.6　鳥・とり・Tori

2005年度 第2回 通常総会報告

＜更なる緑化活動に向けて＞

去る５月21日(土)、神戸中華会館７Ｆにて第２回通常総会・講演会・懇親会が開かれました。
神戸の庭山六甲は、新緑に包まれさわやかな風が心地よい五月晴れの中、会員・理事の方々にお集まり頂きました。総会では一木仁理事が司会をつとめ、まず林同福氏を議長に選出し、2004年度事業報告・決算報告及び2005年度事業計画・予算案が満場一致で承認されました。尚、当日の正会員数295名(団体を含む)のうち、出席者32名、書面による議決への参加者89名、委任状提出者31名、合計152名で総会は成立しました。開会に先立ち石嘉成副代表は次のように挨拶をされました。

黄河の森緑化ネットワークは法人化して２年半を迎え、会の活動は順調に進んで来ました。昨年、日中友好林での植樹には、笹山前神戸市長神戸の実業団体の方々も参加され、会の活動への関心が得られ、組織も面的に広がっています。
しかし、今後共更に日中友好林での緑化活動を充実させる組織として、また中国側からも第２期日中友好林プロジェクトの希望もあり、それには我々の組織を充実させなければならない。数年来の活動の中で、組織の拡大は順調ではあるが、まだ努力が不十分であり、更なる組織の拡大には会員皆さんのご理解とご協力を得なければならない。

また、今年から日中友好林での緑化活動以外でも、地元である六甲山系において植林を開始し、足元での具体的な活動を通じて、ＫＦＧの活動がより多くの皆さんに理解が得られるよう、ご協力とご支援をよろしくお願いします。

森林樹木と菌類

講演者　天野孝之（樹木医、ＫＦＧ顧問）

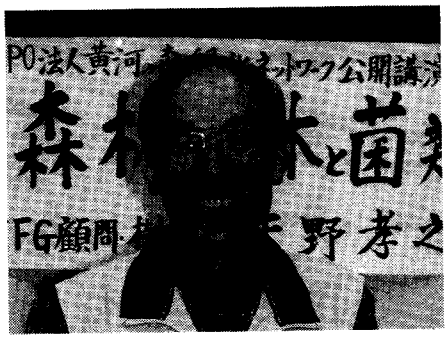
現在、生物は大きく植物、動物、菌類に分けられています。植物は無機物から有機物を生産する生産者、動物は植物が作った有機物を消費する消費者、そして菌類は有機物である動物・植物を無機物に分解する分解者として理解されています。これら三者は、お互いに深い関係を持っています。今回、植物、特に樹木と菌類の関係を見てみましょう。

植物にとって、菌類は植物病原菌の印象が強く、すべての菌類が悪者のように考えられていますが、結構役に立つ菌類、有用菌類がいます。それらの多くは共生菌類と呼ばれ、根粒菌、ＶＡ菌根菌や糸状菌類の仲間で根と仲良く生活しています。根粒菌は、レンゲ等マメ科植物の根と共生し、根に空気中の窒素を固定し、土壌中に窒素を供給する働きをします。ＶＡ菌根菌と呼ばれる菌類は、多くの庭木、草花、野菜等の根と共生し、菌類は根が伸びることのできない、狭いあるいは遠いところまで菌糸を伸ばし養分、水分を吸収し根に供給しています。また植物は葉でできた光合成物質を菌類の栄養源として提供しています。糸状菌はたとえば、マツタケの様にきのこを作る仲間が多くあります。ＶＡ菌根菌と同じような働きをしますが、きのこを作るなど生活様式が少し異なります。これらの菌類利用による庭木の樹勢回復は可能だと考えられますが、まだまだ研究の余地は残されています。

菌類と下等植物の藻類とが共生して一体となっている生き物、地衣類があります。サルオガセ、ウメノキゴケ等と呼ばれ松や梅の古木に付着しているこけ状のものです。これらは樹木に着生していますが、樹木とは共生しておりません。神社仏閣の灯籠や墓石を見てください。石の上にも着生しているのが観察できます。庭木で見つかったら、その庭木が弱っていると考えてください。健全な庭木は、樹幹や葉から揮発性成分を出し、これら地衣類や病原菌の着生や寄生を防いでいます。

庭木の枝葉の病気は、通風や採光を改善することによってほとんど防げます。このためには整枝剪定が必要です。問題は根の環境にあります。
根の周辺には有害な土壌伝染性病原菌が多数生息し、防除は困難です。
これらの病原菌が生活できにくい環境作りすなわち排水、保水、保肥性の優れた土壌に改良します。ミミズが住める環境は、庭木の根が健全に生育できる環境でもあります。根も生き物で、新鮮な空気を多量に欲しがっています。庭木の周辺を６から８箇所程度に分割し、数年かけて庭土に木炭・牛糞堆肥を混ぜ、地下60cm以上膨軟な土壌にします。木炭は有用菌類の住みかとなり、牛糞堆肥は有用菌類のえさにもなります。

山の植物はどんどん変化していきます。たとえば火山が噴火し周辺の植物が燃え尽きて裸地になった跡は、裸地→コケ・シダ類・地衣類→１年生草本草原→多年生草本草原→低木性落葉樹林→落葉樹林→落葉樹＋アカマツ林→常緑樹林と時間をかけて変化していきます。以後、外圧がない限り常緑樹林が続き、シイ類、カシ類、クスノキ、タブノキ、ヤマモモなどが茂り、その下にはアオキ、ツバキ、シキミ、ヒサカキ、サカキなど生育します。このように裸地から常緑樹林になるまで700年から800年はかかります。現状の風景を維持するためには、外からの莫大な力が必要です。



樹木と菌類の関係を講演される天野孝之さん

たとえば、京都市嵐山の渡月橋から見える松山の風景が変わってきています。松山がいつまでも松山であり続けるためには、人間が松山として維持管理していかなくてはなりません。管理者は常緑広葉樹を伐倒し、アカマツやヤマザクラ、ケヤキ等の落葉広葉樹を植栽し昔の景観維持に努めています。松くい虫による松枯れは、この変化の進行を早めています。地上部の植物の変化、落葉広葉樹林から常緑広葉樹林の変化に合わせてきのこ相が異なるように、土の中でも微生物相の変化が起こっています。

自然の流れを無視した砂漠緑化は、莫大な労力が必要です。時間はかかるでしょうが、自然の力をうまく取り込んだ緑化技術の検討も必要でしょう。

六甲山クリーンアップ活動報告

ー小さな活動、身近な視点から地球環境を考える輪を広げるー

ＫＦＧ理事　一木　仁（神戸新聞社）

身近にできることから環境保護をーと４月17日、「第３回六甲山クリーンアップ活動」を実施した。会員10人が参加、好天に恵まれ、花吹雪が舞う中を、清掃ハイキングに汗を流した。コースは阪急岡本駅－保久良神社－風吹岩－横池－高座の滝－阪急芦屋川駅と、お散歩感覚のファミリー向け。午前９半過ぎ、「ＫＦＧ」のマークの入った会の旗を先頭に、いざ、出発。

登山口ではすっかり葉桜に変わっていたが、高度を稼ぐほどに花が増え、300～400ｍではちょうど満開。遠くポーアイ、六甲アイランドから大阪湾を一望するパノラマをバックに、山桜、八重、枝垂れが咲き競い、薫風に花びらが舞う様は、この季節の六甲山ならでは。淡いピンクのコバノミツバツツジ、スミレの紫、純白のタムシバと色とりどりの花に加え、ウグイスの声を楽しみ、イノシシの親子からあいさつを受けるなど、春山の自然を満喫した。

清掃活動も怠りない。登山道近くの雑木林や渓流、谷に投げ捨てられたビニール袋、空き缶から、休憩所付近の土に埋もれた煙草フィルターまで、丁寧に拾い集めた。お山の美化と心身のリフレッシュを終え、午後２時前、ゴール阪急芦屋川へ。

神戸市民の“庭”六甲山は、約百年前は現在の黄土高原の同じくハゲ山だった。その後、植林で緑を取り戻し、市民に親しまれる裏山に変身を遂げた緑化のモデルケース。

収穫物は少ない程よい

清掃ハイキングは、黄河緑化への息の長い取り組みのＰＲ▷地元に根ざした活動の展開▷ゴミ拾いという小さな活動、身近な視点からも地球環境を考える輪を広げるーなどの狙いで昨春から始めた。活動は春秋２回で、今年は10月にも予定されている。日ごろの運動不足の解消、自然との触れ合い、会員同士の交流を兼ねて、是非ご参加をー。

2005年度 植樹ワーキングツアーのお知らせ

今年は秋のツアーの他、夏のツアーには蘭州に３泊をします。友好林での作業、スタッフとの交流を深めたいと考えています。この機会にとお考えの方は、早目にお申込み下さい。

この機会に会員同士の交流および自ら苗木を植えてみませんか！

●夏ツアー　８月21日（日）～８月28日（日）７泊８日上海・蘭州・ﾌﾞﾅ朴・上海
費用￥159,000（関西空港、中国空港施設使用料含む）

●秋ツアー　９月17日（土）～９月25日（日）８泊９日上海・蘭州・カシュガル・和田・上海
費用￥239,000（関西空港、中国空港施設使用料含む）

＊ホームページをご覧になってください。

【お問合せ先】
㈱神戸華聯旅行社　担当　金　啓功
TEL078-391-5185　FAX078-332-4458

2004年度 植樹ワーキングツアーに同行して

ーあの木は、私の母親が植えたんですよー

山　下　貴　史
（毎日新聞神戸支局）

みなさま、蘭州滞在時にお世話になったバスガイドの男性を覚えていらっしゃいますか。名前は、胡明山さんといいます。お会いしたとき、ちょうど50歳でした。紺色のスーツにチェックのネクタイ、そして白いワイシャツに、髪をシチサン（ハチニ？）に分けた、全力投球のあの男性です。

蘭州滞在時のホテルを覚えていますか。そのホテルの裏から１本の柳の木を見ることができました。高さは10ｍを超えていました。その柳は高層のアパートとアパートの間に挟まれながらも、たくましく育ち、緑の葉をつけ、風になびいていました。

「あの木は、私の母親が植えたんですよ」胡さんは右手の指で木を差し示し、うれしそうに私に教えてくれました。

彼の母親は韓桂珍さんといいます。その柳は、1958年に韓さんが植えたそうです。今から47年も前のことです。韓さんは９年前に亡くなったといいます。享年82歳でした。

「たまにこの柳を見に来るんです。母に会っているようで、うれしくなります」

まるで、柳に母親の魂が宿っているかのようです。母親はいつも胡さんを見守っているのかもしれません。

＊　＊　＊　＊　＊

日本人や華僑らが、それぞれの思いを込めながら植えた友好林。木を見つめながら、現地の中国人は何を思ってくれているのでしょうか。

「日本からこの遠い蘭州に、みなさまが木を植えてくれて、感動しています」胡さんはこう言ってくれました。

歳月が経ち、みなさまの植えた、大きく成長したコノテガシワを見た現地中国人の子々孫々、植林活動をしているかもしれないみなさまの子どもさんやお孫さんたちは何を思うのでしょうか。

政治面での日中関係を思うとき、木に宿ったみなさまの思いは、決して小さなものではないと思います。

「この木は100年前にね、日本の△△さんが植えた木なんだよ」

「この木は、うちのじいちゃんが50年前に植えたんだって」

そんな未来を想像するとわくわくします。

みなさまのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

私と環境(3)　丹波市・下滝いろいろ①
「モリアオガエル」

KFG会員
村上鷹夫

近くの自然をボーと見ていると何も見えませんが、よく観ると色々な事が沢山観えて来て、人生が楽しくなってきます。

丹波市山南町下滝、福知山線下滝駅で下車し徒歩約10分で我が家です。篠山川・福知山線・県道77号線が、東西に10km余り、ウナギの寝床のように細長い小学校校区の中心が下滝です。駅・警察・郵便局・農協等一応揃っていますが、校区内に信号機はありません。こんな丹波の田舎で観たもの、観られるものを「丹波市・下滝いろいろ」のコーナーとして、何処まで出来るか分かりませんが紹介していただきたいと思います。

第１回は、モリアオガエル(兵庫県レッドデータブック記載Bランク)です。

日本固有の森林に生息するアオガエルの一種で、５月末から６月末にかけて森の中の小さな水溜りや水田にせり出した木の枝先、池の縁の茂みなどに泡状の卵を産み付けます。産み付ける高さは水面ぎりぎりから10m以上までさまざまです。色は黄白色、大きさはソフトボール位の卵塊です。緑色した中型のカエルで、目の周りは赤みを帯びたオレンジ色や金色です。全ての指に吸盤が発達していて、樹の上で生活しやすいようになっています。

そんなモリアオガエルが卵を産む場所が、家の近くに４箇所あり、２箇所は森の中の池、防火用水池、そして我が家のアイガモ田です。多い年は４箇所で卵が100個になる事もあります。今年もアイガモ田のネットや草むらに20個産んでいます。勿論他の３箇所にも観られ、産卵は夜に行われる為、殆どその様子を観る事は出来ませんが、去年の６月７日の早朝に森の中で、４夫婦が同じ場所で産卵しているのを偶然発見し、写真を撮ることが出来ましたが、感動のし過ぎで上部が切れてしまいました。では何故、アイガモ田に産卵にやって来るのか、①緑肥として20年以上レンゲを咲かせている。②無農薬の田圃である。③アイガモネットが水の中にある。④田圃が森に近い。⑤田圃の持主がやさしい(？)等の相乗効果ではないかと思っています。

しかし、最近カエルが増え過ぎたのか路上で車に轢かれて、死んでいるのをよく見るようになりました。これらの中にはシュレーゲルアオガエル(レッドデータブックCランクで水田の土の中に産卵する)が田圃に移動中に轢かれたのが多いと思いますが、残念ながらどうする事も出来ません。シュレーゲルアオガエルの卵は、田植えの準備で代掻きをすると土の中から20個近く浮いてきます。初夏の下滝の１場面を紹介致しました。

アイガモネットのポールで昼寝をするメス

４夫婦の産卵

絵本からのエコ・メッセージ I
―木を植えた男―

KFG会員　畑中弘子
(児童文学者)

わたしは1913年、荒れ地にさまよい、ひとりの男にであう。男はどんぐりを植えていた。

第１次大戦に参加したわたしはふたたび、荒れた心のまま、その地を訪れる。何と緑がもどっているではないか？

男は木を植えつづけていた。ひたすらに、ひたすらに。

第２次大戦がはじまった。それでも男は木を植えつづけた。大戦が終わって、材木が必要になったが、彼の植えた木を伐採することはなかった。あまりの山奥で、運搬に費用がかかりすぎたから。

それからも男はただ木を植えつづける。

かつて荒れ地であったときは、そこに住むものはいがみあい、憎しみあいながら生活をしていた。未来への夢もなく気品や美徳をはぐくむような環境ではさらさらない。かれらはただ、死を迎えるために生きていた。

ところが今は……。

淡々とつづられる、木を植える男の物語である。読後なぜか、KFGの働きを思いおこしてしまうは、私ひとりではないだろう。

すばらしいお話はまんまんと水をたたえるかつての黄河のように、人々の心をうるおします。機会がありましたら、環境と自然をテーマとした美しいものがたりを紹介していきたいと思います。

ジャン・ジオノ　原作
フレデリック・バック　絵
寺岡　襄　訳
あすなろ書房

黄土高原の植物Ⅳ

紫穂槐、イタチハギ、クロバナエンジュ

ＫＦＧ顧問　徳 岡 正 三（高知大学農学部森林科学科教授、農学博士）

初めて中国へ行って２か月を過ごしたのが内蒙古(内モンゴル)自治区のオルドス高原というところであった。北と東、西の三方を黄河で囲まれ、クブチ砂漠とマオス沙地という九州の大きさほどの荒地が広がる。その後も続けて何度か内蒙古を訪れた。そうしたこともあって、内蒙古で宴会があって、ほどよくお酒がまわってきたときに、つい「内蒙古我的第二個故郷」（内蒙古は私の第二のふるさと）と言ってしまう。こう言うと、かならず一座の人がよろこんでくれるので、毎回言ってしまう。しかしこう言うだけの理由は十分ある。内蒙古で過ごした月日が中国の荒地を知る原点となったのだから。

オルドス高原の南に黄土高原が接している。その黄土高原の北東の隅に内蒙古のハーリンガル県がある。ここの緑化が進んでいるというので見学することになった。現内蒙古農業大学副学長の王林和氏が案内してくださった。氏はかつて高知大学農学部に留学しておられた。

中国の人たちは楽しくわいわいと食事をする。私という客人がいたからかもしれないが、見学前の昼食は宴会的な食事となった。さて、長い食事も終わり、見学地が広いというのでジープに乗っての見学となった。アルコールが入って、ゆらゆら揺らされれば、睡魔が襲ってくる。目を開けていよ
うといくらがんばっても、熱心に説明してくださる現地技術者の声が、すーとどこかへ飛んでいく。つい、うとうと眠ってしまうのである。ふと気が付くと車内はしーんとしている。説明をあきらめてしまったらしい。まことに申し訳ないことであったが、不思議と道の両側にたくさんのイタチハギが育っていたのを覚えている。

前置きがたいへん長くなったが、イタチハギといえば、申し訳なさとともにハーリンガル県が思い出される。

高木に育つニセアカシアに対し、低木にとどまるイタチハギ。成長したときの大きさは異なるが、同じく北アメリカ原産のマメ科の植物で荒地に強く、ともに六甲山でよく植えられている。小さな花が集まって穂状になり、これがイタチの尾に似るところからこの名があると言う。別名のクロバナエンジュは花が紫黒色であるところからきている。中国名の紫穂槐(ズースイホアイ)も花が集まって紫色の穂となるところからついている。５～６月に花が咲くので来年の話になるが、ニセアカシアの白と対比させてごらんいただければと思う。

内蒙古ハーリンガル県のイタチハギ

前回紹介した「中国主要樹種造林技術」にイタチハギも載っている。イタチハギも中国にとって大事な木なのである。ここでは「中国退耕還林主要樹種」（中国林業出版社）という本からイタチハギの働きを見てみよう。この本では「生態林造成の主要な低木」の章があり、50種が紹介されている。その中の１種がイタチハギであるが、「優良な肥料(土地を良くする)、飼料(家畜のえさになる)燃料となり、土壌保全に役立つ特別な経済樹種」として紹介されている。少しなら塩分を含む土地でも生育でき、痩せた山地斜面でも大丈夫といろいろ太鼓判が押されている。蘭州でも大いに働いてくれることだろう。

第4回

六甲山クリーンアップ活動

－身近にできることから始めよう－

緑豊かな六甲山は104年前も黄土高原と同様禿山だった。恩恵を受けている私達はその保全に努める必要があります。小さな美化活動も環境保全への輪が広がります。

今年も下記の要領で実施しますので、会員同士の交流もかねて、歩くことの楽しさと小さな活動にふるって参加しませんか。

- ●日　時　2005年10月16日(日)AM.9:30
- ●集　合　阪急岡本駅　小雨決行
- ●歩　行　約４時30分　６ｋｍ
- ●コース　阪急岡本駅～打越峠～横池～荒地山～横江～風吹岩～高坐の滝～阪急芦屋川駅
- ●持参品　弁当・水筒・雨具・タオル等
- ●参加費　100円（保険）
- ●リーダー　安本 昭久
- ●サブリーダー　矢野正行

六甲山系グリーンベルトの森づくり

－住吉川上流域に苗木を植える－

中国蘭州市の日中友好林の植樹活動は順調に進んでいます。足元である六甲山での具体的な緑化活動拡大としてはじめた住吉川上流域では、コナラ・アカシデ・ヤマザクラ等を250本植えました。今年度も引続き下記の要領で実施します。

- ●日　時　2005年８月７日(日)下草刈り
  - 2006年２月26日(日)下草刈り
  - ３月12日(日)準備
  - ３月19日(日)植樹
- ●集　合　ＪＲ住吉駅　AM.9:00
- ●持参品　弁当・水筒・軍手・タオル等
- ●参加費　100円（保険）

＊参加される方は事務局にご連絡を！

下草刈り準備完了

苗木を植える会員達

KFG主催フォーラム in神戸

ー広げよう 地球に緑を！ー

日　時　2005年10月29日(土)　PM.13:30～PM.16:45
場　所　神戸市教育会館(JR元町駅東口より鯉川筋北へ徒歩10分)
内　容
＜基調講演＞　前中久行氏(大阪府立大学大学院・生命科学研究科教授)
＜パネルディスカッション＞
コーディネーター　芹田健太郎氏(神戸大学名誉教授・兵庫県国際交流協会参与・神戸新聞社客員論説委員)
パネラー　相川康子氏(神戸新聞社論説委員 環境問題担当)
辻本智子氏(環境デザイン研究所所長・淡路夢舞台温室「奇跡の星の植物館」プロデューサー)
徳岡正三氏(高知大学森林科学科教授・ＫＦＧ顧問)
米田該典氏(大阪大学総合学術博物館助教授・絶滅危惧植物対策委員会委員・薬学博士)

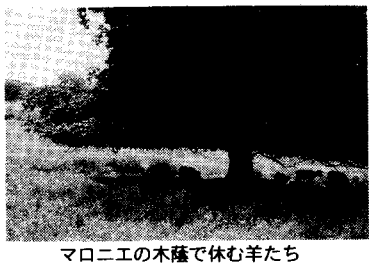
黄土高原の緑化写真展

と　き　10月20日(木)～25日(火)
ところ　神戸大丸９Ｆ
主　催　毎日新聞神戸支局
共　催　ＮＰＯ法人
黄河の森緑化ネットワーク

毎年実施している日中友好林での植樹活動を、今回毎日新聞神戸支局から小川記者が同行します。ＫＦＧ会員にも協力していただき、写真展を開催されます。

鳥・とり・Tori

ＫＦＧ理事　小　舟　史　代


マロニエの木蔭で休む羊たち

去年我が家から育ったつばめが、今春帰ってきました。そしてガレージの巣で卵を生みました。私達家族は、つばめが猫につかまらないようにガレージから車を外に出したり、みかんの樹にいる虫はごちそうに採らずになどして鳥家族を見守りました。まもなく小さな巣から４羽が巣立って、今では家のまわりを大空を飛びまわっています。

先日、イギリスの田舎を旅した時、毎朝３時半頃から鳥(たぶんクロウタドリ)が澄んだ声でさえずりはじめ、１時間後には鳥の大合唱となりました。イギリスの鳥の鳴き声はとても表情豊かでモーツアルトの音楽も顔負けと聞きましたが、ほんとうだなと感動しました。そう言えば、いつかフィリップ殿下がW･W･Ｆの会長をされているとか聞いたことがあります。豊かな環境を守る姿勢があってのことだと思います。ＫＦＧのシンボルマークは黄土高原に鳥を重ねてイメージして作られていますが、蘭州にもいつか緑の山々に鳥が訪れてくれることを願っています。

ご寄付・助成

去年に引き続き“はぁ～とふるふぁんどひょうごボランティアあしすと”より50万円の助成がありました。
どうもありがとうございます。

ＫＦＧ事務局からのお知らせとお願い

●会員の皆さんのご協力により、ＫＦＧの活動は着実に進んでいます。これまで会費･寄付金のお願いは、会員の入会時期を考慮して年２回に分けてお願いしました。しかし、かえって混乱をまねくもとになりましたので、2005年度からは７月号会報の発送時にお願い書を同封させていただきましたので、よろしくお願いします。
●会報への投稿をしてください。ＫＦＧの活動の助言や環境問題の情報、ご自分の考え方をお寄せください。本誌は２月・７月の発行です。締切、紙面の都合より掲載できない場合がありますのでご了承下さい。